

抹茶生産、海外人気に沸く

静岡県の抹茶生産量が拡大している。海外での抹茶人気を受け、生産設備を新設する動きや抹茶用の品種への転換が進んでいるためだ。輸出拡大を目指す県の支援策もあり、2017年度には生産量で全国2位の愛知県を抜く可能性も出てきた。ただ、海外の残留農薬基準への対応や、静岡抹茶のブランド構築など立ちはだかる課題への取り組みも求められている。

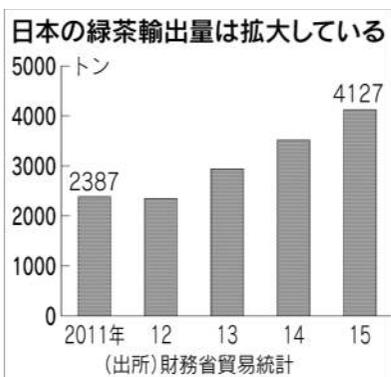


静岡県では抹茶用の茶への品種転換も進む（牧之原市の茶畑）

設備新設や品種転換進む

茶の有機栽培を手掛ける葉っぱ向島園（藤枝市）は抹茶の原料となる「てん茶」の生産に乗り出す。今年秋に着工したてん茶工場が来春完成、17年の一番茶から稼働する予定だ。さらに「近隣の農家にも有機栽培マニュアルなどを渡して生産を促している」と向島和詞園主は語る。

国内で茶の輸出最大手のやまま満寿多園（御前崎市）は年間270トンの緑茶を27カ国・地域に輸出。抹茶人気については、「海外からの引き合



県、来年度2位浮上も

静岡産だけでなく、間に合わないという丸七製茶（島田市）や杉本製茶（同）なども輸出に積極的だ。

県も品種転換の奨励策を通じ、抹茶生産を支援する。昨年度の茶苗出荷本数では、抹茶にも適する「つゆひかり」が全体の43%を占め、主力の「やぶきた」の27%を大きく上回った。国内では急須で茶を入れる習慣が薄れ、「抹茶の輸出増加は重要な地場産業振興策」（県経済産業部農業局）と位置づける。

静岡県の推計で、てん茶生産量は15年度で424トン。京都府の9800トン、愛知県の5055トンに次ぐ全国3位だ。県の17年の生産目標は5505トン。県の茶全体の生産量は日本一であるため、煎茶からの転換などで「来年には愛知県を超える可能性は十分ある」（同）。

輸出拡大、課題は農薬基準

▼抹茶 春に一定期間、茶に覆いをし、うまみ成分を増やした後に茶葉を摘み、蒸した後乾燥させたものがてん茶。これを粉末にしたものを抹茶と呼ぶ。ただ、世界に流通する抹茶（Matcha）に共通の定義はない。国際標準化機構（ISO）は昨年、日本主導

でMatchaの定義を協議することを決めた。基準づくりに最低でも数年かかる見通しだ。静岡で主力の煎茶は茶に覆いをせず摘んだ茶葉を蒸し、もみながら乾燥してつくる。煎茶でも玉露はうまみ成分を出すため覆いをするなど、てん茶との共通点もある。

日本の緑茶輸出は、11年の2387トンから15年には4127トンまで急拡大している。特に伸びているのが抹茶だ。米大手コーヒーチェーンが抹茶

飲料を発売したことをきっかけに需要が拡大。飲料や菓子材料としての利用が多くを占める。輸出拡大にも課題はあ

海外の茶の輸入基準は日本より厳しいため、多くの茶商は特定の農家と無農薬での契約栽培をして対応している。ある茶商は「本気で輸出を狙うなら牧之原全体を無農薬にするくらいの施策が必要」と指摘する。残留農薬の検査費に加え、有機栽培で虫害による茶葉の廃棄量も増え、コストが高くなってしまふ。

ブランド化も急務だ。静岡茶のPRを担う世界緑茶協会（静岡市）は今年、県内で抹茶の輸出拡大に関するシンポジウムを開催。米欧での食品展示会にも参加した。来年1月には米サンフランシスコで開催される米最大級の食品見本市にも出展する予定だ。

抹茶としてのブランド力は京都の宇治などが勝る。国内外の産地で抹茶生産も増加傾向にあるだけに、ブランドを確立できなければ、生産過剰から価格競争に巻き込まれる可能性もある。